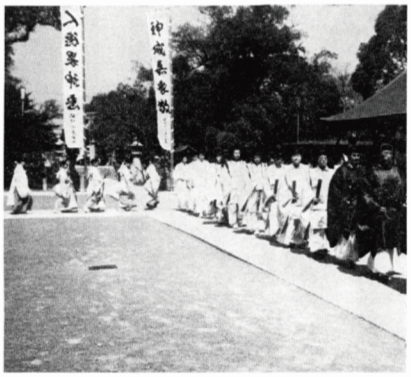
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311代
定価 一年送料共 1000円

春季大祭斎行

═桜花爛漫下に雅楽の調べ═



筑紫路の春を告げる宗像大社春季大祭は、去る三月三十一日より四月二日までの三日間に亘り斎行された。幸い好天に恵まれ、祭典並びに神賑行事も滞りなく執り行われた。

三月三十一日、大祭に先立ち午後五時総社地主祭が斎行され、同六時明日からの大祭がつつがなく盛大裡に斎行される事を祈る、宵宮祭が執り行われた。

翌一日午前十一時、斎館前庭に冠・正服に威儀を正した神職、巻纓の冠、萌黄色の装束の上に太刀を佩いた風俗舞奉仕者、十二単風の衣装を着けた可愛い浦安舞の乙女たち、地元総代が列立し、太鼓が打ち鳴らされ参進、祓含にて祓いを受けた。この後、拝殿に昇殿、雅楽が奏でられる中で、春の山海の幸がお供えされた。そして草津宮司の国家鎮護・五穀豊穣・交通安全と氏子崇敬者の平穏無事、弥栄を祈念する祝詞が奏上され、宗像大社氏子会を代表して斎服に威儀を正した倉元清彦氏が奉幣詞を奏上された。引き続き神楽では、地元青年団有志の奉仕による雅びやかな宮中舞楽の手振を伝える風俗舞、また地元玄海中学校女生徒奉仕による古式ゆかしい浦安舞が奉納された。

翌二日、午前十一時より第二日祭が執り行なわれ、併せて交通安全講社祭が講員六十余名参列の下で行われた。祭典終了後、厳冬の玄界灘で若布を採取された奉仕者に対して、当大社宮司より感謝状と記念品が贈呈され感謝の言葉が述べられた。

総社大祭終了後、同十一時五十分から、高宮祭、第二・第三宮祭が各々斎行された。又同刻、宗像護国神社神前に於ても春季大祭が斎行された。

祭典は、宗像市郡の遺族百数十名の参列を始め、県会議員伊豆善也氏、小山達生氏、市町村長、同議会議長、福祉協議会の役員、氏子会総代等多数参列し、護国の英霊に対して奉謝の玉串が捧げられた。

また同午後三時から、南坊流小方社中による献茶祭が行われ袱紗さばきもさわやかに見事な手前が披露された。

三日間に亘る春の大祭はかくも盛大かつ厳粛に斎行されたが、一方では神賑行事も盛大に行われ、神人和楽の伝統のもと、御社頭も大いに賑った。

尚神賑行事として三月三十一日午前九時から本殿横境内に於て剣道大会が行われ、小学生から一般までの男女剣士四百余名が参加し、日頃修練した技を競い合い烈迫の掛け声が終日神域に木魂した。

また、四月一日午前十時半、大社清明殿に於て吟道鶴洲吟詠会主催による第十回宗像大社春季大祭奉納吟詠大会が開催され、盛会裡に終了した。

昭和六十年献上若布採取者感謝状表彰者名

佐藤　千里（大島漁協）
板矢　純（〃）
池園　廣（鐘崎漁協）
宗岡　伊三（〃）
溝上　時雄（神湊漁協）
花田　経広（〃）
西野　重雄（津屋崎漁協）
西地　喜平（〃）
広渡　房雄（福間漁協）
田畑　五郎（〃）
前田猪和夫（地ノ島漁協）

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二三一（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六五一—九四五六番
京都市下京区沖小路小路北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四三—三三四一番
本社 福岡県宗像郡玄海町 三四三—三三四一番

第六十一回、伊勢の神宮式年遷宮の御用材を供する御杣山が、木曽谷と裏木曽の国有林にと御治定になった。遷宮諸祭儀の初めともいうべき、山口祭、木本祭の日時もつづいて、御治定となった。かねてこの事あるは、予期していたものの、いよいよ御治定の御沙汰を拝しては、この式年御遷宮の重儀の滞りなきよう奉賛甲上げねばならないとの緊張感を一入とおぼえる。

○

皇祖の神宮を式年に御遷宮なされる制度の確立したのは、遠く一千三百年の昔に、さかのぼるが、この遷宮の御祭りは、必ず天皇の綸旨を仰いで行われるとの大義が、固く守られて来た。波瀾多かりし千数百年を通じて、この大義が守られて来たことは、至って貴い日本の伝統である。

この民族の精神的伝統の貴い由来については、神社人は、これを国民全般にたいして周知させる任務があると思う。上代にあっては、神宮は、皇室の定められた大きな神領を有し、御遷宮の綸旨を拝すれば、主としてその神領の経済によってこれを行い、不足することある時は、皇室からの御支出があった。しかるに吉野朝のころから、この神領の保全が困難となり、皇室の御経済もまた御不自由で、御遷宮の御祭りも式年に正しく行われがたい一時代があった。これは国史上もっとも国家暗黒の時代と一致する。しかし、この時代にあっても、綸旨を拝した忠良の

御治定を仰いで

このように世の移り代りによって、経費献上の者は変ったけれども、その皇祖神への御祭りは、天皇の綸旨による大義が固く守られつづけた。

○

前大戦中に第五十九回の御遷宮の事は、そのなかばまで進行中に、前古未曽有の皇室国家の混乱がおこって、後半の事務が中絶した。神宮崇敬者が、往年の古例を考えて国民浄財によって遷宮の大事を奉賛した。しかしこの経済の変遷を見て、祭儀の本旨を解せざる者の中には、御遷宮をもって、天皇祭祀の御本質が変ったかのごとくに錯誤の論をなす者があった。神宮崇敬者は、神宮祭祀の本質不変の大義を明らかにすべく、政府に要望し、政府も昭和三十五年、池田内閣総理大臣名をもって、神宮の祭りが天皇の命によって行われる伝統は、今もなお変るものでないと確認した。この確認に基いて第六十一回御遷宮の事務は、一切を御聴許による綸旨によって行い、その精神的伝統の不変なることを明らかにした。

今回の御遷宮に際しては、昨年の二月神宮大宮司が陛下より特にお言葉を賜って感激し、一切を御綸旨に基いて、事を進めることにした。伊勢の神宮の御遷宮とは、ここに略記したように、天皇の綸旨によって行われる天皇の御祭りである。この千三百年の伝統の至って貴いことは、神社人ならば誰にでも分る。神社人が、奉賛活動に力を入れて、一人でも多くの国民が、この聖なる国民の伝統護持に努力すべきを切望してやまない。日本人が日本人としての心を保ちつづけるためにも、それは有りがたい奉仕である。

○

この御遷宮は、精神的には天皇の皇祖神への御祭りたることを第一義とするのはいうまでもないが、その祭儀も、それに伴う万般の事も「神祭る昔の手ぶり」を正しく継承して、日本民族の文化伝統としても貴重なる意義を有する。それは既に、政府も公に確認しているところである。そうだとすれば、政府もまた、然るべき奉賛の道を考えるのが当然ではないか。

現憲法下においては、諸般の問題があり、前憲法下の帝国政府や、徳川氏の幕府ほどのことはできないのは分っている。しかし日本国の象徴であり、国民統合の象徴であらせられる天皇陛下にとっての第一義の護持について、一千万も二千万もの世帯の国民の奉賛の熱意の集中する時に「政府は一切なにもせぬ」というのでは、不自然ではないか。民族文化伝統の大切なことを公言する内閣諸大臣に対しても、周到にして賢明なる方途の研究を要望しておきたい。

（神社新報より）

余滴

春の選抜野球大会は、高知の伊野商が初出場ながら次々と強豪を倒し、美事に優勝の栄冠を勝ち取った。喜びに湧く故郷の町に帰還した選手一行は、出発前に必勝祈願をした町の氏神様に先ず御礼の参拝をして、それから優勝祝賀会に臨んだという。この選手達に限らず、中継テレビの画面には、緊迫した場面で身体につけたお守らしいものをユニフォームの上から握りしめ、目をつむってお祈りしている選手の姿が再三見受けられたが、大観衆の中で誰一人手助けしてくれる者もなく、孤独に耐えてプレイする若者の胸中には、いつになく神の存在が大きく感じられたであろう。

スポーツだけに限らず、現代に生きる我々は、いわれのない不安感を常に抱きながら毎日を暮しているのではないだろうか。交通事故、大気汚染、食品公害等々、文明が進めば進むほど事故の起る不安は我々の身の廻りにつきまとう。どれ程万全の科学的管理を行っても、なおかつ偶発的事故を絶対に避けることは出来ない。先端技術を駆使して開催された筑波科学万博の開幕早々報ぜられた入場者数計測機の計算ミスは、皮肉なアクシデントであった。現在、多くの自動車がお守りをつけて走っているが、昔、田舎道を往来した荷馬車が果してお守りをつけていたであろうか。近代文明の発展、近代科学の進歩が新しい意味のお守りを必要としている。勿論、交通安全のお守りをつけておれば無謀運転しても良いとは恐らく誰も考えてはいまい。しかし、それは反科学主義なのではなく、むしろ科学主義を成立させるワキ役であり潤滑油なのである。

第二八五回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎選

毎月末日〆切

原　町　中村　幸
献血の適はぬ夫とわれとゐて日の差しくれば蘭に水やる
（評）家族らが献血に出払ったあとの老夫婦の哀感。「日の差しくれば」に続く動作が共感を呼ぶ。

大　島　中村さつき
炭焼の崩れし窯の跡ありて積りし腐葉土臭ひを放つ
（評）炭焼窯から起こる生活感と腐葉土の臭いとが、どこかで繋がっていて味わい深い。

大　島　目原　節子
樹海にも似たる椎山下りゆく踏みゆく落葉の他に音なし
（評）森閑とした深山の息吹き。上三句までの表出は見事だが、「ゆく」の重なりは避けねばならない。

宮　田　片山　朔子
ふくらめる白もくれんの蕾をも濡らして一日雨降り止まず

東　郷　藤崎　辰子
霊台橋のいはれ聞きつつ川岸の宿に名物の虹鱒を食ぶ

自由ケ丘　後藤君代
治療まつ部屋に見しらぬ人とゐて冬の日和をよろこびあへり

日の里　清原　絹代
雲間もる日に誘はれて来し畦の芹やわらかく指に冷たし

大　島　本田よしえ
汐ひきし汀にそひて帯のごと緑を延べて海草光る

大　島　屋形とみえ
海鳴りとも風の音とも聞きわけぬ春一番の轟きやまず

香　椎　桜井　ツ子
街川の氷る流れに突っ立ちて命果てゐし鷺をまた思ふ

原　町　中村　幸
献血の適はぬ夫とわれとゐて日の差しくれば蘭に水やる

原　町　八波　五月
四年（よとせ）余り姑をみとりし向ひ家の嫁に葬りの帯締めてやる

八幡西　山田　耕夕
豪雪の北と桜の咲く南同時に告ぐる今日のニュースは

大　島　板矢あきえ
風邪に臥す孫を訪ね来し夕昏れに足すくませて春雷を聞く

徳　重　石松や寿子
北風の吹きて明るき空のもと城山の稜線浮出て見ゆる

田　熊　今村　重刀
垣根越しに花の苗など分けあひてまじはり長し隣り家の人

吉　留　白木うめの
日の温み保つ石垣に身をよせて病後の友の話聞きたり

曲　天野トモエ
心楽しき便りが二通届きたり三月近き陽ざしのけふを

戸　畑　田中ハツセ
ゆれてゐる車内の園児かばふとと保母は脚巾広げて立てり

南　郷　片山　碧村
露草を刈りゆく朝の心地よさも日重ね出来ぬ老い身寂しむ

池　田　永富　臻
胃透視に異状がなくて安堵せり帰りは町の書店に寄りぬ

武　丸　原田まつ代
庭隅に挿木なしたる山茶花に水やる度に新芽数える

池　田　小田　イセ
若き日の苦楽を語れる友は今日故郷離れて遠くに行きたり

武　丸　立石ろせ乃
見映えせぬ蠟梅の花ひそと咲きよき匂ひたつ雪の庭隅に

深　田　中野　節子
雨上りは草取り易く握りたる萱草に指三本いためぬ

下半身の麻痺に耐えつつ編みくれしセーターを着て八所宮詣りす

原　町　八波　五月
みくれしセーターを着て八所宮詣りす

吉　留　高山　信子

松尾神社祭斎行

―新酒の仕込みを感謝して―

去る三月十九日、恒例の北筑杜氏（ほくちくとうじ）組合主催による酒造奉賽が午前十時、末社松尾神社、引き続き本殿に於て斎行された。この祭は新酒の醸成を無事に終えた奉賽の祭である。時刻になると自慢の酒を手にした杜氏さんが顔を見せ、拝殿の前に新酒が供えられ、午前十時祭典が開始された。宗像祢宜の祝詞奏上の後、杜氏代表者による玉串が捧げられ、祭典が終了した。又同様に本殿に於ても斎行された。

今年の正月は暖冬で、各酒造家とも醸造初めには早熟が懸念されたが、其の後の気温が引締ったので良い工合に出来たということである。昨年十二月末からの米の選定、そして造りこみに至るまで、この一本一本の新酒には杜氏さんの感慨が込められている。酒の繊細な美味しさには、やはり長年の経験と勘とが大きくものを言っている。それだけに杜氏さんが長い間、家人と離れて室屋にこもり、ただ一心に酒造りに取り組む生活は、言葉に言い尽くせない苦難の仕業である。

日本人の生活になくてはならない酒。喜こびにも悲しみにも口にされる酒。杜氏さんの手にして来た新酒には、今年も無事に迎える事が出来た生活歴が物語られている。

祭典終了後、一同斎館で直会がなごやかに行われた。神社からの心尽くしのトリスキで懇談会に入り、職員も参加して酒造りの苦心談に花が咲いた。

中津宮幣殿幕を新調

―沖西芳雄氏が奉納―

大島村鎮座中津宮の幣殿幕は、昭和五十四年、当時中津宮奉賛会の役員をされていた山口賢七氏によって奉納されたものであったが、月日と共に痛みが甚しく、此の程七年ぶりに新調され掛け替えられた。

献納したのは、奉賛会役員を務める沖西芳雄氏（72）で、今年は年男でもあり、奉賛会を代表しての節分祭福豆打奉仕を感謝して、何か記念になるものをという事で、此の度の奉納となった。

沖西氏は大正二年一月三十一日、芳一郎・クリ夫婦の長男として生まれた。

十五才の時から家業の漁業の道へと進み、父親の厳しい指導によって一人前の漁師に成長した。

永い間、当社沖津宮鎮座の沖ノ島近海を漁場として、宗像大神の加護のもと、幾度となく大漁の幸運に恵まれたが、父親を亡くしてから以後、大島周囲に漁場を移し、生活を営む様になった。

昭和四十年にはアジ網仲間を結成、近代漁業の先駆者の一人として、大島漁業に多大な貢献をなしてきた。

また、家長として次男彰氏（奉賛会副会長）、三男鶴夫氏（奉賛会役員）をそれぞれ独立分家させる等、沖西家の長としての務めを立派に果たしてきた。

この間、テルヨ夫人とのあいだに二男、二女をもうけ、先年御子息にアジ網の権利を譲り、現在では小型船で好きな晩酌のお菜取りくらいの気持で漁を楽しんでいるが、鯛、スズキ等の高級魚が網に掛かると、新鮮な海の幸を献魚としてお供えすべく、竹籠を手にテルヨ夫人が参道を登ってこられる。

沖西夫婦は大島でも評判のおしどり夫婦で、家長である沖西氏の額に刻まれた深い皺に、平穏な人柄を見る事が出来る。

今回奉納された幣殿幕の左隅には、小さく夫婦名が記されている。

責任役員会開催

―昭和六十年度予算案をはじめ諸議案を審議―

昭和六十年度の当社予算案審議を中心とした、責任役員会議が、去る三月二十三日、午前十一時より当社儀式殿会議室に於て、渡辺茂太郎、山本三吾、河野幸人、八波武、田中富樹以上五氏と、当社より葦津宮司以下関係職員数名出席の下開催された。

開会の辞に続き、葦津宮司より挨拶が行われ、現況の社務状況が報告された。先ず会議に先立ち、去る三月二十日に病気の為永眠された、倉田興人責任役員の冥福を祈る黙祷が出席者一同により捧げられた。

引き続いて、昭和六十年度宗像大社予算案審議に入り、宮司より本年度の予算編成は、諸支出の引締めを計り、昨年度並みの抑制型としている旨の大綱が報告された。続き各担当者よりそれぞれ説明がなされた。

予算審議は社務本局、海洋分局、文化財管理事務局と続いた。

海洋分局の中では、沖津宮現地大祭につき、今年は日本海々戦八十周年にあたり、その記念行事の中で、東郷元帥を偲んで、フィンランド製の東郷ビールを手配中であり、又中津宮の七夕揮毫会の三十周年記念祭を行うとの報告がなされた。

又文化財管理事務局からは、重文指定の色定法師一筆一切経の修理状況の説明が行われた。修理は昭和四十年より始まり、全四三一巻の内三七三四巻を現在まで終了し、残り五九七巻の修理はあと六・七年費やす見通しである。その他、沖ノ島の神宝修理も順調にすすんでいるとの報告が行われた。

続き、その他の議案についても、宮司並びに各担当者より報告を行い、これら各議案につき、全役員種々の検討を行い、又順次慎重に審議がなされ、諸議案は承認された。

【授与品紹介】

車輛用御守（8）

◇錦鍵守（にしきかぎまもり）

今回は、当大社に於て授与する交通安全守札の中で、一般的に馴染みのある錦鍵守を紹介致します。

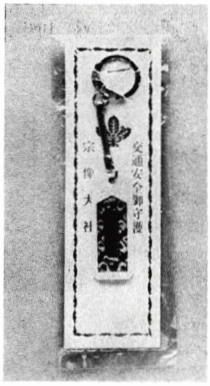
この錦鍵守は、一般的にキーホルダーとして馴染まれており、その造りは、紺地の中に金箔を貼り表には当大社々紋の「楯の葉と実」下に宗像大社名を入れ裏には、厄除交通安全御守を挿入したもので、透明プラスチックの周りに白色プラスチックでデザインがなされ、タテ四・五㎝、ヨコ一・八㎝に五㎝の鎖をつけたものであります。

この錦鍵守は、風雨、汚泥、損傷等に強いので、車輌等にだけではなく、家などの鍵をつけるなどアクセサリー的感覚で広い用途に使用出来ますので、若い人からお年寄まで幅広く好評を得ています。

錦鍵守の初穂料は左記の通りです。

一体　五〇〇円

―◇―◇―



✽お車の交通安全祈願祭とお祓をご希望の方は授与所受付にお申し出下さい。

祭典初穂料は次の通りです。

一、大型車・特殊自動車
一台　五、〇〇〇円也
一、普通車・軽自動車
一台　四、〇〇〇円也
一、自動二輪車・軽車輌
一台　三、〇〇〇円也

✽祭典を申し込まれました方には、

一、交通安全守札一体
一、安全ステッカー一体
一、神宝館拝観券一枚
一、撤下供物

を授与致しております。

✽遠方にお住いの方、参拝不可能な方には郵送による交通安全祈願の祭典並びに交通安全守札授与の受付を致しております。

詳細については左記へお問合せ願います。

〒八一一―三五
福岡県宗像郡玄海町田島
宗像大社々務所
祭儀部賽務課
TEL（〇九四〇）六二―一三一一㊥

〔祭典案内〕

沖津宮現地大祭

来る五月二十七日、筑前沖ノ島鎮座宗像大社沖津宮に於て日本海海戦八十周年記念の国家鎮護現地大祭を斎行致しますので、参拝希望の方は御連絡下さい。

記

一、参拝日程

1 五月二十六日　日曜日
午後六時までに中津宮（筑前大島）に到着し届け出る事。受付後宵宮祭に参列する事。

2 五月二十七日　月曜日
午前六時大島出発。午前九時沖ノ島到着、直ちに海水にて禊。午前十時祭典。午後一時沖ノ島出発。同四時大島到着、解散。

3 渡海船（大島〜神湊間）
大島発午後四時二十分、同六時。

4 当日荒天等のため渡島不可能の場合は大島の沖津宮遥拝所に於て祭典を斎行致します。

一、要　項

1 参拝者は沖津宮奉賛会費として一名八千円をお納め下さい。

2 五月二十六日は大島にて斎泊。宿泊所、食事（弁当）は各自で御手配下さい。

3 乗船者数に制限がありますので、参拝希望の方々の内より当社で厳選の上決定致します。

4 年令七十才以上の方の渡島は関係筋の通達によりお断り致します。

尚、長時間の乗船に堪えられない方や健康状態が良好でない方は、御遠慮願います。

参拝申込書、心得、要項等を用意しておりますので、返信用切手同封の上左記宛御申込み下さい。

一、申込先

宗像郡玄海町田島
宗像大社儀式課行
電話（〇九四〇）六二―一三一一㊥
〒八一一―三五

神郡社寺めぐり（8）

徳満神社（玄海町）

今年は神武天皇即位紀元二千六百四十五年、平年乙丑（きのとうし）である。

そこで、牛の狛犬のあるめずらしい神社に参拝した。当大社祈願殿前の大駐車場より北西の方位に深田と呼ばれる部落がある。この部落内に「葦木神社」（アシキジンジャ）と呼ばれる鎮守様がある。宗像末社七十五社の一つである。

この葦木神社境内に、境内神社二社があり、

徳満神社
祭神　大己貴命

須賀神社
祭神　素盞嗚命

の社殿がある。あまり広くはないがいかにも鎮守の森と呼ぶにふさわしい、しずかな境内である。

この徳満神社の前に立つと拝殿の右側に一・五メートル余の石像の「うし」が寝そべっている。

五月二十六日は大島にて斎泊。宿泊所、食事（弁当）は各自で御手配下さい。

この徳満神社になぜ牛の石像が多く奉納されているのであろうかと、神社史、郡史を調べて見たが由緒が定かでない。

古老の話るを聞けば、近年まで、この神社境内で、祭日に農耕用牛馬の市がたっていたとの由である。この様子から推想すれば、いつの頃か、この牛馬市に関係する人が奉納したものであろうか。

この地方は、玄海町内でも有数の田畑広がる農耕地である。中央に郡内一の釣川が流れ、四季の作物が年間休む事なく実る土地である。又十数年前までは、菜の花が一面に広がり黄色の絨毯を敷きつめた様な風景が見られたものである。

戦前はもとより戦後の昭和二・三十年頃までは、各農家には農耕用の牛馬が一、二頭はいた。しかし高度成長の昭和三・四十年代に入って農業の機械化が急速に進み、現在では町内には数頭の牛馬が飼われているに過ぎず、それも半ペットとしてである。時の流れとは云え淋しい感がある。

水田に四方の山影を写し、スゲガサを並べ田植する昔ながらの「お田植」風景は、もう今はない。緑濃き作地は一日にして耕運機で水田と化し二・三日で田植機が早苗を生け、田植は終る。畦で合唱するカエルも練習期間がないゆえか年毎に声が小さくなる感じがする此頃である。

牛も馬も動物園でしか見る事の出来ぬ今の子供達が境内で四、五人遊んでいる。「これは何んだろうね」とたずねたら、「おじちゃん、これが牛だよ、こっちが馬だよ」と小さな指をさした。

近い将来たずねても知らぬ子供が多くなり、やがてこの徳満神社の牛石像も忘れられて行くのであろうか。眼下の田畑は初春のうららかな光りの中、やがて来る稲作の準備をしずかに待っている。

社団法人 全日本菊花連盟
九州・沖縄地区菊作り同審査員研修会開催

去る三月二十三日より二十四日の二日間、神湊のビーチホテルに於て社団法人全日本菊花連盟九州・沖縄地区菊作り・同審査員研修会（主催―(社)全菊連、同宗像大社支部、自然流国芳会支部、熊本県支部、九州西部支部。後援―宗像大社、宗像大社菊花会）が全菊連本部より常務理事(兼)事務局長・竹田誠一先生、並びに常務理事(兼)総務部長・内田孝一先生の両氏を招いて開催された。

当日は天候にも恵まれ、昼すぎより会場のビーチホテルには出席者が三々五々到着、宮崎や熊本などの遠方からも出席を得て、参加者は一〇〇名を数えた。

第一日目は、午後二時より開会式を執り行い、開会式終了後の午後二時半より内田孝一先生による「大輪菊（盆養、切花）栽培方法について」の講義が、休憩の後午後四時より、竹田誠一先生による「福助、だるま作り育成方法について」の講義、午後五時より竹田先生による「全菊連の組織と運営について」の講義があり、現在の全菊連の組織についての説明及び運営についての説明が行われた。

又、現在の全菊連の事務所が仮事務所なので、新しく事務所を建設するにあたり、会員の皆様の協力をお願いする旨のお話しがなされた。

午後五時半からは、全菊連競技花「筑波の華」の特徴と栽培方法について、内田先生より説明が行われた。

この筑波の華は、昭和五十四年の実生で当才時、改作年、そして三年目までは厚物咲き、四年目には剣走りが出て厚走りとなる。その後厚物にも咲けば厚走りにも咲く。特徴としては、幹はあまり太くなく、葉型は丸味を帯び厚味がある。花弁も厚味があり広巾弁である。多肥性ではあるが残肥した時は開花が遅れ花弁不足になると最後立弁になり花芯のまとまりが悪くなる。通常十一月上旬頃には九分咲きになるので八月下旬頃より十日間ガードすれば良い。

講義の後、質疑応答に入り活発なる意見が出されていた。

この様に午後六時まで長時間に亘り講義が行われたが、休憩の後午後六時半からは、九州・沖縄地区合同懇親会が催され、各自の自己紹介、カラオケなども飛出して盛会の内に第一日目を終了した。

第二日目は、午前九時すぎより「審査員の心得及審査の要点について」竹田先生の講義が行われ、審査する時の基準及び注意事項の説明、審査員の服装「背広着装、ネクタイをする」などの注意がなされた。午前十時すぎ全ての日程を滞りなく終え、盛会の内に研修会を終了した。

研修会開催にあたり、各全菊連支部の役員並びに宗像大社菊花会の役員の皆様方のご協力に対し厚くお礼申し上げます。

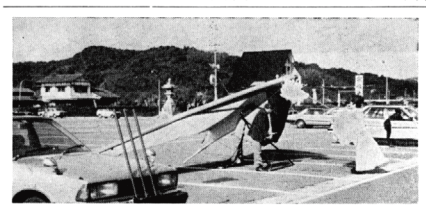
ちょっと変った祈願祭
ハンググライダーのお祓い

普段は参拝者の自動車が並ぶ当大社大駐車場に、空を鳥のように自由に舞いたいと願う人達の夢をかなえる、ハンググライダーが持ち込まれ、一風変った空の交通安全祈願祭が斎行された。

この空の交通安全祈願を受けられた方は、北九州市八幡西区に在住の福田弘さんで、余暇には空の散歩を楽しんでおられる。しかし空の散歩も一つ間違えば、天国から地獄となりかねないだけに、無事故を願って参拝され、大駐車場にて、翼を広げたハンググライダーと共に神妙にお祓いを受けられた。

当大社では、今迄にも航空機のお祓い、或いは自転車、モーターボート等のお祓いなど、自動車やバイク以外の交通安全、又は海上安全の祈願祭はたびたび斎行されたが、今回のハンググライダーのお祓いは初めてであり、時代の移り変りを目のあたりにした。

交通安全の守護神として崇敬されている当大社だが、空を舞うハンググライダーが自動車の中に混ってお祓いを受ける光景に、参拝者もの珍しそうな様子だった。



宗像大社責任役員
倉田興人氏の逝去を悼む
―享年八十三才―

去る三月二十日午前七時半、当大社責任役員の倉田興人氏が老衰のため東京都杉並区阿佐谷北の自宅で逝去されました。

倉田氏は宗像郡神興村（現在福間町神興）で、明治三十四年五月二十日に倉田主米造氏の三男として生を受けられました。

神郡神興村の倉田家は、歴代庄屋と云う名家で、父主米造氏も宗像を代表する敬神家でした。この様な家庭に生を受けられた興人氏も敬神の念厚く、昭和五十六年二月、麻生太賀吉氏の後任として、当大社の責任役員に就任いただき、以来四年間御尽力をいただいたものであります。

倉田氏は、昭和四年に九州帝大（現九大）を卒業、同年三井鉱山に入社、田川鉱業所次長、三池鉱業所次長、本社総務部長などを経て二十九年取締役労務部長、三十三年常務と歴任され、三十八年には三井セメント初代社長に就任されました。さらに三十九年三井鉱山社長、四十七年同会長、五十年には取締役相談役に就任され後輩に道をたくし五十二年から相談役として活躍され、とくに石炭業、セメント業界に於ける重鎮として財界活動に尽力されました。又三池鉱業所次長時代には、大牟田市民会館の建設を応援されるなど、郷土愛深き人であった、当時大牟田市助役であった山田亀一元市長も惜別の辞をのべられています。

倉田興人氏の逝去にたいし心より御冥福をお祈り申し上げます。

社務日誌抄

三月一日　月次祭
三月二日　孔大寺神社祭
三月十一日　新出光石油㈱新入社員外四十九名参拝
宗像郡遺族会役員会
三月十二日　古札焼納祭
社団法人宗像青年会議所会員厄除祈願参拝
三月十四日　伊勢湾シーバース㈱専務大稔剛平氏参拝
三月十五日　出光興産㈱大浦油槽所所長外三名参拝
宗像郡・市遺族会合同役員会
三月十八日　出光興産㈱福岡支店新入社員八名参拝
三月十九日　松尾神社祭
大分県滝尾敬神会、大分神社長山宮司外七十名参拝
玄海町消防団第一分団歴代分団長参拝
三月二十一日　皇霊殿遥拝式
宗像大社氏子会評議員会
出光興産㈱顧問白谷信一氏参拝
三月二十二日　東海大学第五高等学校野球部必勝祈願参拝
宗像大社古文書編纂委員会
三月二十三日　宗像大社責任役員会議
全日本菊花連盟九州・沖縄地区菊づくり研修会並びに審査員研修会
三月二十六日　当大社旧職員（元巫女）十名参拝
三月二十七日　出光興産㈱名古屋支店・東海アポロ㈱参拝
三月三十一日　東京中野氷川神社総代十三名参拝

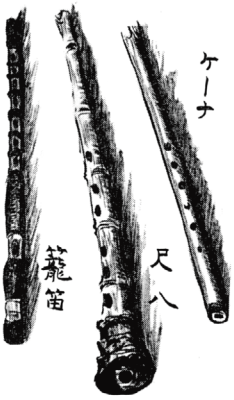
―インカの響き―
南米の音楽に魅せられて (2)

アンデスの文明を象徴する葦笛〝ケーナ〟、葦竹を束ねた〝シクーリ〟（アンデスのパンパイプと呼ばれている）、打楽器〝ボンボ〟（太鼓）等で演奏する形が最も古い演奏方法と推察されますが、ギター、チャランゴ等の弦楽器も今日では欠かせない演奏楽器の一つとなっています。しかし、元来インカ文明は弦楽器を知らなかったと思われるので、これら弦楽器は中世紀頃、スペイン人の侵略後に導入されたものでしょう。

インディオの歴史、音楽、そして宗教（インカは太陽信仰）を見つめてみると、アンデスの民族音楽は実に東洋的であり、楽器の特質、五音音階（半音を含まないドレミソラの音階）にもとづく旋律は、祭祀音楽であったと思われるなどをとどめるが、時代の変遷、特にインカ帝国の成立期、弦楽器の導入の中世を境に、次第に民族音楽的性格を有するに至ったと考察されます。

ペルーのクスコでは毎年五月、太陽の祭りが催されますが、この祭典の為にアンデスの麓、インカの遺跡に太陽の神殿が設らえられ、往時のインカ帝国を偲び、アンデス最大の祭りが行われます。

インカ皇帝役の合図に従い、ケーナ、シクーリ、ボンボ等の楽器が奏でる哀愁を帯びたメロディーに、祭りに参加したインカの子孫達は陶酔し、そして心は四百年前のインカ時代へと誘われる様です。



また〝コンドルの祭り〟という祭典もあります。

この祭りは、牛の背中にくくりつけられたコンドルが、狂ったように走り回る牛を、その鋭いくちばしと爪で攻撃し、観客はそれを眺めながら酒宴をくりひろげるというものです。もともと南米大陸にいなかった牛を、スペインの象徴に見たて、その牛を南米の象徴であるコンドルがいたぶるのを眺めて楽しむという、やや残酷な感じもするお祭りです。

楽器の紹介をしてみたいと思います。

アンデス音楽の中で最も重要な、そして代表的な楽器は〝ケーナ〟ではないでしょうか。

ケーナは、カーニャと呼ばれる南米葦で作られた縦笛ですが、その構造はいたって単純です。一方に眼をあててのぞいてみると向う側がみえる、単なる管です。その管の一方の端に切れ込みがあり、そこが歌口（吹口）になっています、そして表側（歌口のある側）に六個、裏側に一つの穴があります。もちろん歌口の切り方や、指穴の位置、管の内径等、いろいろ微妙な問題もありますが、大体の構造は以上述べたような簡単で素朴な葦笛ですが、雅楽の〝龍笛〟のもつ哀愁さと、〝尺八〟のもつ澄明をミックスした音色は、多くの人達の琴線に共鳴するものと思います。

つづく

神島記

戦時中の沖ノ島 (1)
―岩城利正氏よりの投稿―

玄界灘の孤島、沖津宮が御鎮座する沖ノ島にも、昭和十四・五年頃より大日本帝国陸・海軍の防備衛所が置かれ、終戦迄数十人の兵士達が軍務についていたようである。

大東亜戦争も末期、昭和二十年一月はじめ、沖ノ島の防備衛所副所長として着任した、東京都府中市在住の岩城利正氏より、先頃当時の模様を伝える手記を頂戴、沖ノ島の裏面史としてここに紹介する。

「沖ノ島防備衛所 勤務のいろいろ」

一、鎮海防備隊所属衛所は、南鮮の海岸線、対馬、壱岐等の各地にあった。何れも僻地にありはしたが、地続きの集落、村落が近くにあり、外出時にささやかな楽しみもあった訳だが、沖ノ島衛所勤務は、絶海の孤島、周囲四キロほどの小島、外出はない、気晴らしの対象もない、女人禁制は勿論のこと、接するのは男ばかり、補給船は月に一度、それも海の荒れている日は来ず、来ても目前にしながら荷揚げが出来ずに遠ざかって行くこともある。沖ノ島勤務が敬遠されて当然、本当の島流しである。

一、着任したのは二十年一月十日、輸送の船から揺れる通船に跳び下り、小さな船付場に上陸した。僅かな浜、見上げる巨巌、心細い気分の目に、高札場にあるような立札が入る。墨黒々と、上陸の際は海中で身を浄めること、女人禁制のこと、大小便を島の中でせぬことなど、幾条か掲示されてあり、宮内省とある。宗像大社沖津宮の鎮座まします島で、島は皇室に属すると聞いていた。

一、沖津宮は、一ケ所しかない狭い浜から急な坂を登り、巨巌に囲まれた樹林の中の神殿に祀られていた。皇族（誰方かは記憶にない）の筆になる扁額、御神勅が金文字で浮いていた。東郷元帥率いる連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を撃破したのはこの島の近海である。宗像大社の留守神職と言われる老人は、日本海々戦の時この島の頂上で殿々たる砲声が長時間に亘って轟き、拝殿で必死に勝利を祈ったと語っていた。

一、社務所で小冊子を貰い、またこの神職からの話を聞き、この島が「古事記」「日本書紀」に記されており、天照大神の三女神の一人多紀里毘売命、亦の御名、奥津比売命、島全体が皇室の御物、一木一草といえども島外に持出すことは禁じられている神代ながらの神聖地であることを知る。

つづく

宗像大社歌会 俳句作品集（二六六）

藤沢　井上　玄洋

春の海潮路つらねて動きけり

津屋崎　西住吉三郎

境内に放し飼ふちゃぼ下崩ゆる

本町　広渡一寿軒

うすら眼を覚まし春田の初蛙

田熊　安部　ゆき

喜寿迎え寝つかれぬ夜の夢朧

田熊　力丸　一郎

三日過ぎ五日となりぬ春の風邪

福岡　力丸ゆずる

鯉刎し音より水の温み初む

鐘崎　岩瀬　辰夫

椿咲いて小鳥楽しそう宗像宮

福岡西　入江　柳江

ひなまつり博多のならひ四月なる

玄界沿岸地名探訪

粕屋郡古賀町鹿部（しぶ）・皇石神社

（12）の1

いしいただし

粕屋郡古賀町の国鉄鹿児島本線、古賀駅近くに、鹿部山という標高五〇メートルほどの小さな山があります。山というよりは森といった方がいいかも知れません。付近一帯は住宅公団の高層ビルが建ち、少し除になったようです。山の頂上に年中日の丸を掲げてあるところです。

公団住宅が建つ前は、鹿部山は三つの峰からなる三上山でした。

中央が六五・三メートルと一番高く、東峰が五七メートル。その二山は削平されそこに住宅が建ち今はありません。

現在残る西峰は標高五七・五メートル。その中腹には塩安神を祀る皇石（おおいし）神社が鎮座しています。

鹿部の名を最も著名にしていますのが、この山を中心として残る古代遺跡群です。

まず明治三一年旧正月元旦、神社の裏の崖が崩壊しましたが、そこから二口の細形銅剣と銅戈があらわれました。皇石神社周辺は、弥生時代の甕棺墓地であったのです。

また周辺からは、おびただしい弥生式土器類が採集されて、考古学者の間では少し知られたところとなりました。

鹿部山の三山の中央部と東峰の二山が削平されて、ここに住宅公団による大団地が造られることになり、昭和四七年七月から一二月の五ケ月間、九州大学考古学教室と福岡県文化課との共同によって、発掘調査が実施されました。

鹿部山には唐ケ坪（とうがつぼ）、浦口（うらぐち）等の古墳群がありますがその多くは、破壊と盗掘を受けていました。しかし発掘の結果、古くは五世紀後半から七世紀頃まで築造された事が判明したのでした。

また発掘調査の前年、中央峰の山中で、地元の人が経筒を掘り出し、その遺構を確認するための調査も行われました。経筒は永久元年（一一一三）の銘を持ったもので、平安末期のものです。

この鹿部山遺跡群のハイライトは、皇石神社のふもとに古くから土器片が散布していた「東町（とうのまち）遺跡」でした。

水田を掘りさげる度に、おびただしい弥生時代の土器や石器が出土し、第三層の粘土層から、累々と重なるようにして木器群があらわれました。

鋤、自在カギ、曲物等の数々、トレンチのあちこちで驚きと歓声が湧き起ったものです。

木器といえば、戦前の奈良県唐古（からこ）遺跡、戦後の静岡県登呂（とろ）遺跡が著名ですが、遺物の内容はそれに劣らない優品の数々、約四〇数点が出土しました。

要するに鹿部山遺跡群は縄文末期から人々が住みはじめ、弥生時代の中頃には銅剣銅戈を有するムラ、五～七世紀にわたる古墳時代、そして平安時代には経筒が埋納されていることが分かり、長期間にわたる生活や信仰、墓地が営まれたのです。

さて鹿部という一風かわった地名と、その山に鎮座する皇石（おおいし）神社をさぐってみましょう。

筑前続風土記には、鹿部という名と共に、鹿府と記されたものもあります。

古賀に在住されている長崎初男氏によれば、志々部と記したものもあるといいます。

しかし鹿部の名が最も古いものは経筒の表面に記された銘文でしょう。

この経筒は発掘調査の前年に地元の人によって掘り出されたものです。

金銅製有節経筒と称され高さ二二・六センチ。（写真）

かっての鹿部山、今は右側、西峰しか残っていない。

文化財を伝えていくには

先月の初旬以来、各報道機関が先を争いニュース面を賑わしてきていた、福岡市西区の「飯盛遺跡」も四月の声を聞くと、遺跡保存のために埋めもどし作業に入ったと伝えられる。このことは、とりもなおさず埋蔵文化財保存の一例と言えよう。

飯盛遺跡は、博多湾にそそぐ室見川の上流に位置する。山沿の高い台地の上に造られた弥生時代前期（約二二〇〇年前）の墓域である。ここの地域は、先年来多方面目的の造成地として、国の手によって区画整備の工事が着手され、同時に遺跡の調査発掘がなされてきていた。これにより広範囲にまたがり、同一時期の墳墓が群がるように造られ、埋葬施設の墓域であることが判明したと伝えられている。その内でも一木棺墓より、多紐細文鏡をはじめ、銅剣・銅鉾・銅戈・多数の装身具等、当時の王権の象徴的な品々が多量に出土してきた。この木棺はこを統治していた族長の墳墓であったであろう。また周囲に発見された多くの墳墓からも、多種多量の出土品をみている。このように弥生前期の一墳墓から当時の最高の品々が、まとまって一括出土した例はなく、今回がはじめてである。さすが遺跡の宝庫、弥生文化の中心地福岡といっても過言ではない。特に朝鮮より渡来してきた多紐細文鏡の出土例は数えるほどで、今度が第六番目と言われている。

この地を「伊都国と奴国との中間に位置するサワラ国であった。」という人もいるが、この時期は、いまだ国家形成前の時期でもあり、一部族による原始共同化が論じられているようで芽ばえてきた時期と考える方が妥当であろう。

我が国での考古学調査は、東京都大田区に存在する「大森貝塚」の学術調査が、明治十年（一八七七年）にアメリカ人のモース博士によって行われたのが最初である。それからもう一〇〇余年を越える歳月が流れている。この間にも、古代社会と古代文化とを探求出来ある多量の資料を有する遺跡が調査され、世に多く発表されてきた。何時も繰り返えし論議されることではあるが、考古学の調査発掘が数多く行われる度に、学問研究と埋蔵文化財の保護との接点で、どちらが先か・どちらを守るべきか、の問題点が提議されつづけている。

また、近年この一、二年の間に考古学ブームが再度出現してき、世間で古代文化が論じられているようである。考古学は広い外圏を持ち、日本人のルーツを探ぐる誰でもが飛び込める学問ではあるが、底も非常に深いとも言われている。

これら発掘により出土してきた資料、発見できた遺跡の保存・保護をしながら、同時に一般の人々に理解しやすく広く公開していくのも、文化財保有者並びに団体の課せられた使命でもある。

文化財についての考え（27）

楽松　子

それぞれの博物館施設のより良く知ってもらう面から考えると、やはり展示に関する問題点の研究と技術革進が急務であろう。展示施設を最大限に利用し、歴史部門の館では全体社会の流れと文化を広く理解してもらい、同時にその地方のしめる役割を対比させ、理解しやすい展示と解説をする研究と技術の向上が先決である。このことが一番の受け持つ役目の一部を考えて述べてみる。

一、資料の収集・整理
一、資料の保存・保護管理
一、名称・年代・生活用途の区分
一、理解しやすい展示による一般公開

（対比パネル・解説パネル・名札・映画・スライド・VTR等の利用）

方と平行して、展示物を等各館とも展観だけでなく、公共性を有した山積の問題点を多くかかえてはいる。自然を対象とした部門・美術工芸部門・歴史部門等数多くの種類の分野に区分されるが、それを統括して全て博物館と呼ばれている。これらは、社会教育施設の一環であり、設置された地域・場所により、それぞれ特異性もある一方では各館の共通性をも多く持っている。

全ての施設が博物館のあり方に、各館との共存性および共通性にかけるともいわれている。学術的研究の使命はわかるが、博物館員は研究者のみの学者集団では ない。各館ごとの交流も少ないことも問題点があるが、同一分野の館ごとの共通のつながりと、協調性にかけているとも言える。一車ごとの館の独自性は、各館が開催する特別展に於て行っていると思う。しかし地域の文化は、平常展に於て行ってきている。このことは、博物館の利用者・見学者にも同様のことを考えてもらわなければならない問題点でもあると言える。苦労でもある。博物館の体制の内で研究施設の拡充と補充のことが言いつづけられてはいるが、研究施設が整った館は非常に少ない。大きな組織を持つ博物館は、大学の研究室の延長である感じがし、入りにくさとともに、一般の人への伝達的な役割りからはなれ、各館との共存性および共通性にかけるともいわれている。学術的研究の使命はわかるが、博物館員は研究者のみの学者集団では ない。各館ごとの交流も少ないことも問題点があるが、同一分野の館ごとの共通のつながりと、協調性にかけているとも言える。一車ごとの館の独自性は、各館が開催する特別展に於て行っていると思う。しかし地域の文化は、平常展に於て行ってきている。このことは、博物館の利用者・見学者にも同様のことを考えてもらわなければならない問題点でもあると言える。

宗像むかし話（六）

幽霊船（下）

奇怪な光芒を投げて、幽霊船は行く。暗黒の潮流を蹴って、宗任の亡霊は呼ぶ。

「津和よ、ひるむな、安住の天地が待つぞ、男の児を産め、猛きもののふを育てよ。」

執念の声は鋭く、闇をつん裂いて津和の耳朶を敲く。何か答えようとあせったが、声にならない。我を忘れて宗任の幻影を凝視しつづけた。

「見えたぞ、密領の迎え船が」と、喜とばしげに叫ぶ若者の声に、ふと我にかえった津和。夢か、うつつか、確かに宗任の乗った船が、わが小舟を導いていた筈だが、東天ほのかに白みかけて、ゆく手に河野党の軍船とおぼしき二隻が待っていた。一同はやっと救われた面持である。右馬太は疲れた津和をはげまして、超人的な連日の働きも知らぬげに、ゆったりと微笑んだ。

追跡の役人は、小舟を見失っただけでなく、夜が明ける頃、津和瀬の浜辺をぐるぐる漕ぎ廻っていたことに気づいて、一同落胆自失、昨夜来の奇怪な謎が、宗任の亡霊の仕業とわかって慄然とした。

おお、幽霊船／その夜、玄海に起った出来事は、波は語らず、御嶽の鳥は答えずとも、いつしか村人の噂となって広がり、無実の罪を怒り、敗残の死を憎る宗任の執念を弔うため、一基の碑が祀られ手厚い供養が行われたのである。

今も大島に、この辺りには見かけぬ形の彼の墓石が存する。心ある村人は、彼の菩提を弔い香花を手向けている。津和瀬に寄せる波音は、この英傑の末路を悲しむが如く、美しい侍女津和の貞烈を讃えるが如く、千年の秘琴を奏でている。

おお、執念の幽霊船／

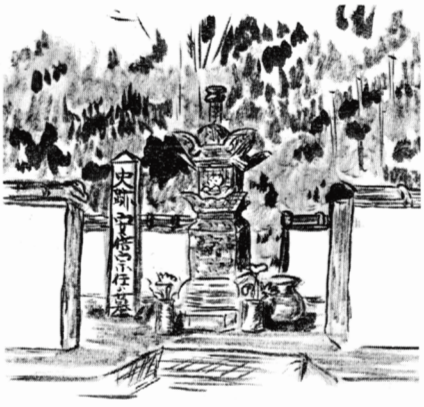
宗任は大島に移される前に、一時宗像の土穴に幽閉されたとの説もあり、今日の土穴の地名は、当時の故事による由。伝説は真偽を分明にし得ないところに妙味があると思うので、歴史の真実は永遠の謎と断ずる先哲の意見に従って、ホジクリ学者の真似はすまい。

途中で物語の筋道が、変てこな土穴論にそれたが、津和と、その産んだ宗任の遺児の物語に、話を戻そう。

河野党は宗任の教えた造船技術によって、瀬戸はおろか、玄海、壱岐、対馬にも、覇をとなえる程の秀れた軍船を持つようになった。宗任の請いを容れて、津和を壱岐に逃がし、遺児の成長にも薩の援助を惜しまなかったのも、単に悲劇の勇将への同情だけでなく、水軍発展の指導者だった彼の恩義に報いる武士道からでもあった。

歴史の舞台は転々、鎌倉時代に入って、宗任の遺児の子孫は壱岐から平戸五島方面にも勢を得、世に謂う海賊大名、松浦党となって、その軍船の威力は、四国の河野水軍と並んで声望四隣を圧した。元寇において、博多湾に河野一族のめざましい奮戦が伝えられているが、松浦党も、亦壱岐や、肥前の沿岸防備に大活躍。巨大な元軍の兵力を各地に破摧した功績は、まことに看過できないものがあったと云う。

次いで南北朝の争乱、室町時代から戦国の抗争、それぞれ松浦党が大きく動いていたのである。

その松浦党の始祖は、安部宗任の後裔であると大日本史は明かに伝えている。むべなるかな、陸奥の勇名を馳せた猛虎の血は、西海の波涛に躍る飛龍となって流れ、その転機にわが筑前大島も一役の秘聞を残した次第。

なお付け加えておくが、宗任の墓は筑前新宮沖の相の島にもある。何かの事情で、ここでも彼の菩提を弔う始末となったのであろう。純朴な島人の愛情によって、両島の墓碑がいつまでも大切に保護され、慰霊の祀りが絶えないよう願ってやまない。